

瘦我慢之説

過日、静岡県立大学の仕事で静岡市を訪れ、帰途、清水の興津清見寺に立ち寄つてみた。ここには「咸臨丸殉難諸氏記念碑」がある。かつて福澤諭吉がここを訪れ、記念碑に彫られている榎本武揚による揮毫をみて、怒り心頭、急遽、東京三田の自宅に帰り、一気に認めたものが名節「瘦我慢之説」だということを知っていたからである。

明治維新後、徳川藩は大幅な減封の上で駿府城に移封された。明治十四年の秋、福澤は駿府城は今どうなっているのかが気になって、東海道を下った。道すがら、最近建てられたと聞く記念碑に線香でもあげようかと清見寺を訪れた。手を合わせて死者を弔い、石碑の後ろに回って福澤は驚愕する。なんとそこには「食人之食者死人之事」（人の食を食む者は人の事に死す）と刻され、揮毫したものが従二位榎本武揚とあるではないか。「徳川の幕臣として仕え、緑を食んだ者は徳川家のために死すべきだ」という趣旨のことを、榎本が後世に残る石碑に刻んでいいはずがないと福澤は憤怒する。

渡辺利夫（公益財団法人イースカ会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究所博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任（二〇一〇年十二月退任。二〇一七年六月より現職）。

咸臨丸とは日米修好通商条約批准書交換のために渡米するポーハタン号の護衛艦であり、福澤もこれに乗船していた。この咸臨丸、その後は幕府の運搬船として使われ、清水港に停泊中、官軍の攻撃を受けて乗員の多くが死亡。だが、官軍の目をはばかりて誰も死者を咸臨丸から引き取り葬ってやるものはない。みかねた清水の俠客・山本長五郎が手下を使って死体を下船させ、清見寺に埋葬、その後有志によって建てられたものが記念碑である。

戊辰戦争において榎本は軍艦八隻を率いて品川を脱出、函館の五稜郭で蝦夷地政府を樹立するも、官軍の猛攻を受けて敗退。東京に護送され禁固刑に服したが、その後は新政府でトントン拍子の出世だった。函館の戦いに参じて惨死を余儀なくされた多くの兵士をそのままに、みずからは明治政府において位人臣を極めた者が石碑にそんなことを刻みつけていいのか。「成ればその榮譽を専らにし敗すればその苦難に当るとの主義を明にするは、士流社会の風教上に大切なこと可し」。男・福澤の心根である。